

主張

IMF-JC副議長／電機連合中央執行委員長 有野正治

IMF-JC歴史探訪

IMF-JCは議長、副議長、事務局長経験者の皆さんに顧問に就任いただいております、先日その顧問の皆さんとの懇談会が行われ、初めて出席をしました。(懇談会は、開催日の前日にご逝去されたJAM出身の藤原 巖顧問への参加者の黙祷から始まりました。改めて哀悼の意を申し上げます)その後の懇親の席上、私の隣に座っていた元IMF東アジア地域事務所代表の小島正剛さんから私へ「電機さんは今でも米国のケネディー元大統領の署名入りメッセージ飾っていますか」と聞かれ、何も知らない私は「えっ、何ですか、それ」としか返事できませんでした。小島さん曰く「1962年の第10回電機労連(当時)大会が甲府で開催され、IMFに加盟しているIUE(全米電機ラジオ労組)の会長が来賓

として挨拶に来て、その通訳を私がやったのです。その時、当時のアメリカ大統領であるケネディーが自筆署名したお祝いのメッセージを持参したはずですよ。」というのです。自分がまだ7歳のころの話であり、その日まで先輩方にも聞いたことがなく、その場では同席している電機連合出身の藁科さん、岩山さん、鈴木さん、古賀さんに助けを求めるとはありませんでした。かろうじて「そういうえば聞いたことがあるな」と言っていたいたのは藁科先輩でした。その話題で場は盛り上がりましたが、肝心なメッセージがその後どうなったのかは分からずじまい、結局私が調べる羽目になりました。

役では手に負えません。何とか電機連合50年誌にメッセージをいただいたことが明記されており、事実であることは判明しましたが、現物がどこに行ったのか所在はわかりません。

このことがきっかけでその当時の出来事について記念誌を読んでいたら、電機連合(当時は電機労連)がIMF-JCに加盟するにあたっての興味深い記事がありました。

JCの生い立ちと電機の加盟

すでに世界的な活動をしていたIMF(国際金属労連)と日本の金属産業労組の交流は1952年に始まりました。その後交流を深める金属関係の組合も増えていき、IMFは1957年に日本事務所を開

設するに至りました。しかし、当時の日本の金属関係労組が加盟するナショナルセンターは総評、同盟、新産別、中立労連などと分かれており、運動論(イデオロギー)の違いなどから、それを乗り越えて金属関係が一つの集合体を作ることは、金属関係労組内外を問わず難しい課題でした。しかし、当時の瀬戸日本事務所長とダンネバークIMF書記次長を中心とする先輩諸兄の懸命の努力で7年の歳月をかけ、1964年にIMF-JC(国際金属労連日本協議会)が発足したのです。

さて、電機連合のIMF-JC加盟に向けた動きについて振り返ってみます。IMF-JC加盟に向け検討をしていた電機連合は1962年の第10回定期大会において、いきなり加盟提案を行うのではなく、まず国

際連帯を深めていることを組合員に理解してもらおう意味で、IMFに加盟している前述のIUEの会長と世界労連・金属インターの書記長それぞれを招待し、ご挨拶をいただきました。流れの異なった二つの組織を招待した背景は、組織内に左右対立という構図が大きく残っていたからでした。

翌1963年、第11回大会でいよいよIMF-JC準備会加盟の提案をするに至ったわけですが、加盟に関する全文削除の修正案が出されるなど、議論は伯仲したようです。その反対理由は「国際組織に加盟する前に内部組織としてやるべきことがある」「華やかな運動より低賃金の改善などが先決」等々。しかし本音は「IMFは国際自由労連と関係があり、反共・分裂主義、アメリカ政府と一致した政策のもと沖繩のアメリカによる占領を認め、軍事基地に賛成、安保条件などの賛成の立場で、これに加入すれば運動方針との矛盾が生じる」というものでした。今では考えられないことですが、当時はそれぞれの立場を主張することで必死だったのだと感じます。

の後「我々の運動は共産党とは明らかに一線を画している、従って世界労連と国際金属労連とを並立に置く中立的な立場はあり得ない」等の意見も出て、最終的には修正案は否決され、JC加盟が承認され、現在に至っています。

IMF-JC加盟にあたっては電機以外の加盟産別にあっても様々な苦勞があったと思います。

歴史的役割や今後の展望をふまえた論議を

私は今回のIMF-JC定期大会で副議長に就任させていただきましたが、恥ずかしながらこのようなJC発足の歴史や意義を深く知りませんでした。今、自分なりにJCの歴史を振り返ってみると、日本の労働運動に対するJCの果たしてきた役割は相当大きなものがあると感じています。

発足当初で言えば、金属労働運動の視点を世界に広げたことや、共産主義との決別にも寄与したこと、そして総評、同盟、新産別などのナショナルセンターの枠を超えた組織を形成したことで、その後の「労

線統一」の引き金になったことなどが挙げられると思います。

JCは中核産業の集まりであることから、否応なしに春闘でのリード役を担う立場にあります。「JC共闘」「JC一発回答」などという言葉はまさにJC春闘の代表名だと思っています。

その後、時代の流れとともにJCの活動も多様なものとなって、金属産業としての産業政策の策定、それに合わせて政策・制度要求の強化など活動領域が広がっていきましたが、20年前に連合が発足し、国際運動や、政策・制度の取り組み等でJCとのバッティングするエリアが広がりつつあることから、JC

内部にも「JCの在り方」について論議しようという機運が強まっています。

もちろん、時代に即して組織の見直しは必要ですがJCが果たすべき役割や、これまでの歴史、今後の労働運動の展望など十分に踏まえたいえで結論を出していくことが重要だと、今回のJCの歴史探訪で感じた次第です。

そういえば例の、故・ケネディーアメリカ大統領にいただいた「電機労連10周年を祝すメッセージ」はどこに行ったのでしょうか。会館をリニューアルしたときに紛失したのかも？ 現在、全員総出で捜索中です。



IMF-JC副議長／
電機連合中央執行委員長

有野正治 ありの・しょうじ

1955年4月、山形県生まれ。74年日立製作所入社。82年7月日立製作所労組水戸支部執行委員。92年7月同水戸支部書記長。98年7月日立製作所労組中央執行委員。2000年7月同労組書記長。06年7月同労組中央執行委員長。10年7月電機連合中央執行委員長(現)。10年10月連合副会長(現)